令和３年度１０月の読書会のテーマ

「感化力について理解を深める」

目的：感化力をより一層深く理解するため

今回の読書会は、7月の読書会の「海外から見た日本人について（日本の歴史から考えてみる)」から繋がる「感化力」ついて考えてみたいと思います。

○中江藤樹（なかえとうじゅ）ゆかりの地

7月9日の読書会の全職員の感想文シートを読み、大いにインスパイアされ、刺激を受けて、7月17日（土）に愛車ジムニーをかっとばし（高速道路を時速80キロですが)、日帰りで滋賀県にある近江商人中江藤樹記念館と藤樹書院に行ってきました。

（↑近江聖人中江藤樹記念館）

館内はコロナ対策が徹底していて、他の来客もなく貸し切り状態で見学をすることができました。

記念館の資料や藤樹書院の良知館で購入した参考図書をその後読み込み、中江藤樹さんの400年も続いている感化力について学んだことをお伝えしたいと思います。

○江戸時代初期の時代的背景

戦国時代が終わり、武から文へ、徳川家康は武力統治から学問で日本を統治する方向転換を図りました。

支配階級の武士たちは、腕っぷしだけでなく学問を修めておかないと要職につくことができなくなりました。

徳川家康は、古（いにしえ）から伝わる中国の儒学を利用して日本の統治する政策をとりました。

儒学とは、2500～2400年前に生きた孔子や孟子といった中国の昔の聖人たちが唱えた学問です。

知識のみではなく、人としての生き方を説き、国を治めるために、組織を治め、家族を治め、そのためにまずは自分自身を修める「修身」という「人としての生き方」を説いた学問です。

知識よりも「人の生き方」を説く儒学は、徳川家康が天下泰平のため、戦さのない平和な世の中を築くために、封建社会を維持する目的で、儒学の忠孝や忠義という考え方を利用することを目的としました。

平和な世に中を維持するために、力による乱暴な行いよりも、儒学を利用して道徳心を植え付けることに重きを置き、外様大名を含め家来たちをいいなりにできるように利用したと言えなくもありません。

○そのような封建社会初期に中江藤樹が目指した学問

中江藤樹（なかえとうじゅ）は、徳川家康のブレーンとして活躍した林羅山（はやしらざん）という学者に批判的な人でした。

儒学の流れをくむ朱子学を利用し封建社会を維持するために、林羅山の学問を、封建社会で媚び諂う世渡り上手な道具としてなり下がった学問として堂々と批判したのが中江藤樹です。

そして朱子学から発展してより体制に媚びない陽明学を日本に紹介しました。

陽明学とは、王陽明という人（500年前）が、「知行合一」（本当に知るということは行動に移すこと、わかっているのに行動をしないことは本当にわかっていないという過激で危険とも言われた行動的な考え方をもっており、幕末の吉田松陰や西郷隆盛に受け継がれていきます）という主体的、独立的、孤高の哲学を説いた学問でした。

権力者や為政者に媚び諂いへりくだるのではなく、古の聖人が説いた儒学を、より主体的で本物志向の行動重視の傾向を持つエキセントリックな学問であると、陽明学は識者たちから表現されるような性質をもっています。

そのため為政者である徳川幕府からは、陽明学はキリスト教のように危険視された学問でした。

（＊エキセントリック＝「個性的で普通ではない性格、言動や行動が奇矯な様子を形容する言葉として使用される。一般市民だと奇人変人の意味で芸術家だと誉め言葉として使われることが多い」）

（↑記念館の中の王陽明（右）と中江藤樹（左））

○中江藤樹の生い立ち

中江藤樹さんは1608年生まれです。

滋賀県の小川村というところにある裕福な農家の長男として生まれました。

名前を中江与右衛門といいます（自分自身を「藤樹」と名乗ったことは一度もありません）。

9歳の頃、父方祖父が武士だったため祖父の養子として武士の道を歩みだしました。

11歳の時に論語の『大学』に書かれている内容を見て「誰でも学べば聖人のような尊い生き方ができる」という言葉を見つけ大興奮しました。

「自分も孔子さんや孟子さんのようになりたい！」と決意し猛勉強を開始します。

猛勉強ぶりの成果もあり、「孔子殿」と周囲から茶化されるほど、儒学を自分なりに解釈し人に教えることができるようになりました。

伊予大洲藩の中でも、そんな真面目で真摯な勉強を続ける中江藤樹を尊敬し、教えを乞うような仲間も増えていきました。

しかしながら儒学の「孝」が大切だと皆

に説いているのに、故郷の小川村には年老いた母親が一人で生活するようになっていました(父親が亡くなり、妹も他家に嫁ぎ)。

そんな状況で中江藤樹は、伊予大洲藩を２７歳の時に命がけで一人故郷に残された母親に親孝行をするために脱藩し（当時、脱藩は重罪にあたり死罪の可能性もありました)、生まれ故郷の近江の小川村に帰ります。

そのまま武士でいたならば郡奉行として一生食うに困らない安定した地位と収入を保証されていたのにかかわらずです。

ただそれだけでなく、そのまま伊予大洲藩にいても、林羅山の説く朱子学が幅を利かせ始めていて、自由に学問をすることもできなくなると考えたからでもあります。

目指すは、「孔子や孟子のように自由に自説を広める立場になりたい」、「自らの学問の道を深め、聖人のような生き方を実践し、それを武士のみでなく庶民にも広め、小川村を聖人村のような素晴らしい地域社会にしていきたい」、という夢も描いていました。

そこで藤樹書院という私塾を開き、１１歳からの夢であった聖人のような生き方を目指したのでした。

（↑藤樹書院）

○中江藤樹の思想の深さと強さ（感化力の神髄）

中江藤樹が現代に至っても評価され続けているのは、学問を極める姿勢があり、尊敬する孔子や孟子、王陽明の教えをそのまま学んで終わらなかったことにあります。

偉人に倣う・阿る(気に入ってもらおうとすること)・真似をするだけではなく、自分の考えまで発展させ深め、それをわかりやすく周りの人たちにも伝えたところに中江藤樹の功績があります。

中江藤樹の教えは、儒学の朱子学や陽明学と同じではなく、それらから影響を受けつつも、道教（老子の教え)、仏教、神道からの影響を受け、「藤樹学」と表現されるような「心の学問＝心学」と言われる独自性があるものまで高めたところにあります。

その中心的な考え方は以下の通りです。

中江藤樹は、孟子の教えである性善説(人はもともと善いものを志向するのだという説）を基盤としています。

『大学』という書物から、「人には磨けば磨くほど光り輝く心の鏡のようなものを誰でも持って生まれてくること」を学び取りました。そこから逸れて悪い方向に傾いてしまうのは「自らの心を磨くことを怠ること」が原因であるのだと表現しています。

朱子学は、この世界に真理というものがあって人間が研鑽を重ね学ぶことが必要であるという考え方が土台になっています。

それに対し中江藤樹は、真理というものは人間が生まれ落ちた時から持ち備えて生まれてくると考えるようになりました。ど

んな人にもその真理が心の中にあって、それを生かすも殺すも自分の心の持ち方次第にあると考えたのが、孟子の教えを発展させた中江藤樹の思想の土台にあるものです。

まるで古代ギリシャ時代の哲人ソクラテスの魂の哲学（人は善く生きるために生まれてきたとする考え方・徳のある生き方の追究）に対する考え方と似ています。

誰もが生まれ持っている真理をいかにその人から引き出すことができるのかが、人を育てることの醍醐味だと考えていました。

周囲に真摯に自らの心を磨いている人がいれば、周りの人たちはその人に影響を受けて磨くようになるのだと表現しています。

中江藤樹の教えの根幹は、「心がけ」が正しく嘘偽りがないほど心を磨き自らを高めていれば、自然とそれは周りに感化を及ぼすという「結果に現れるもの」だという考えです。

「これだけ自分は心を込めて取り組んでいるのに、まわりに伝わらないのは周りの人たちが愚かだからだ」という言い訳をして逃れることを戒めています。

「心がけが本物であれば、自然と結果に現れてくる」という大変厳しい教えです。

ある意味、実力主義の教えです。

「原因と結果の法則」の教えです。

それが宇宙の根本原理であり、そのことを「孝」の力なのだと表現しています。

「言い訳」や「逃げ道」をなくし、ただひたすらに「自らの心を磨き続ける」ことを課した人生でした。

そのための学問を継続し、「聖人」と言われるような人になりますが、生きている間は、とても悩みもがき苦しんだ学問の道を歩んだ人であるとも言われています。

ただ藤樹書院を訪れた門人たちにとっては、そこまで真摯に真剣に学問に打ち込み苦悩する中江藤樹を見て、ますます尊敬し見習いたいと思う人が増えたということです。中江藤樹には「真心」があると門人たちは尊敬していたのだと思います。

決して偉そう自己満足する人ではなく、常にだれに対しても誠実に真剣に「共に学びましょう」という姿勢を崩さなかった人でした。

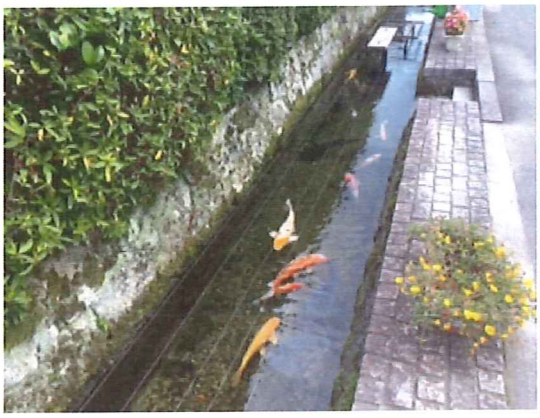
○中江藤樹の影響力（思想の結果）

「藤樹神社」

近江聖人中江藤樹記念館の敷地には藤樹神社がありました。神社に行くとお守りやお札、絵馬が売られていましたが、なんと無人販売で、支払いは賽銭箱に投げ込むように書かれていました。人を信じることをここでも実践されていて驚きました。

「活き活きとした鯉」

藤樹書院には、7月の読書会で紹介されていた鯉が活き活きと泳いでいました。無人販売の餌を買う方式がここでもとられていました。



「弟子を尊敬する」

記念館で紹介されていた童門冬二さんの『小説　中江藤樹』(上下巻) を読み終えました。その中に馬方又左衛門の話が紹介されていました。

中江藤樹に弟子入りした熊沢蕃山(くまざわばんざん)という人（中江藤樹に感化された歴史に名を遺した武士）が、京都で師匠を探している時に、同じ宿屋のお客さんに２００両忘れてしまった飛脚がいて、又左衛門の話をしていたところ聞きつけ、藤樹書院を訪れたエピソードが紹介されていました。

その時に熊沢蕃山は、学問の壁にぶち当たっていた中江藤樹に弟子入りを断られたのですが、偶然そこで又左衛門に出会います。

目の前に飛脚に２００両正直に返した噂の又左衛門を前にして、その話を又左衛門にすると、又左衛門はその美談が噂になっていることに驚きました。

なんと又左衛門はその話を自慢と受け取られないように誰にも話していなかったことを熊沢蕃山が聞き、再度驚きました。

「なんと謙虚な人なんだろう！」と。

結局のところ、熊沢蕃山はその美談を中江藤樹に伝え、そのようなお弟子さんを育てる人からなんとしても学びたいと粘りました。

中江藤樹自身も、普段、藤樹書院に出入りしていた門人に、そのような心の美しい行いをして人に自慢もせずに当たり前のようにふるまっていたことを知り大変驚きました。中江藤樹は弟子である又左衛門を自分よりも聖人だと尊敬したとのことです。

馬方又左衛門は、読み書きができませんでしたが、読み書きができるだけで知ったかぶりの野暮な学者よりも、よっぽど心を磨いている聖人であると感心したのだと思います。

「門人想い」

中江藤樹の門人に伊予大洲藩時代から付き合いのある大野了佐という人がいました。知的な遅れがあり武士を諦め医師を目指し

ていた大野了佐に懇切丁寧に教えました。熊沢蕃山のように歴史に名を遺す門人（武士）もいましたが、才覚よりも真摯で真面目で素直な人を大事にしたことで、より一層門人から尊敬を集めました。

「言いなりではない孝」

年老いた母に対する「孝」の気持ちが強かった人でしたが、30歳の時にお嫁さんをもらうときに、紹介された娘さんが器量よしではなかったために、母が門人の手前、もっと器量よしのお嫁さんももらうように忠告したとのことです。しかし中江藤樹はその娘さんの澄んだ瞳を見て、母の言うことを聞かず、とても大事にしたとのことです。外見や才覚ではなく、あくまでもその人の本質は中身、心の在り様だということを実践した人でした。そのお嫁さんは中江藤樹の母親によく思われていないのを承知で、家のことに尽くしたことで母親が反省する程の人物だったようです。

「聖人村」

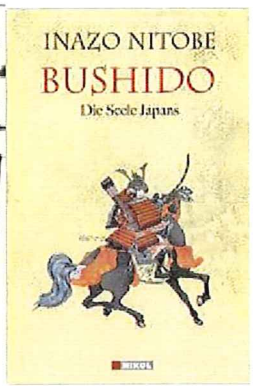
記念館や藤樹書院の近くには「中江藤樹の道の駅」までありました。年に2回は中江藤樹を讃えたお祭りを継続しています。400年近く継続し、高島市小川村という村が、中江藤樹が目指した聖人村になっていることを直に感じ取ることができました。

日本の歴史上の人物で「聖人」として尊敬されているのは、中江藤樹ただ一人だと言われています。

「世界に知られる中江藤樹」

1894年に内村鑑三が英語で出版した『日本及び日本人』（あとに『代表的日本人』と改題）に中江藤樹が「村の先生」として紹介されています。この本はケネディ大統領やシュバイツアー（ノーベル平和賞受賞）が愛読していた本です。

1899年に新渡戸稲造が英語で出版した『武士道』は世界的名著としてセオドア・ルーズベルト大統領が絶賛しています。その『武士道』で紹介されている内容は、中江藤樹が儒学と仏教と神道のよいところを取り上げ独自の藤樹学と言われる心を磨き続けるという心学を打ち立てた影響が、その後の武士道の教えの中心となっていった経過を読み取ることができます。



日清戦争（1894～1895年）日露戦争（1904～1905年）に勝利した国がその頃、世界中から注目されていました。

開国して30年もたたない丁髷（ちょんまげ）をして「ハラキリ」という奇妙な自殺をする黄色人種の野蛮人が住んでいると西欧諸国から思われていた国が、大国を破ったことで注目を浴びました。

海外に留学した内村鑑三と新渡戸稲造という親友同士の二人が、誤解されている日本人像を世界にしっかりと伝えるために書いた本の中に、日本人の徳性を磨きあげた中江藤樹という人の影響力を感じ取ることができます。

この２冊の本は、未だに日本という国に興味を持っている海外の人たちによって読み継がれている世界的名著となっています。

海外に留学した人がよく目にするのは、日本について関心が高い外国人の学生たちによって読み込まれている本がこの２冊だということです。

この世界的名著となっている２冊の本の中で、日本人の生き方が紹介されています。

心がけとその結果を厳しく自分自身に課し続けた心学を人々に広めた中江藤樹の功績が現代にも続いており、更に世界にも知られていること自体に、その思想の強靭な影響力を感じます。

○感化力をより一層深く理解する

7 月の読書会の感想文シートを読む中で逆に私自身がインスパイアされ、長年訪れてみたかった近江聖人中江藤樹記念館と藤樹書院を訪問することができました。

一人の人間の真摯な実学（実際の生き方を学ぶ学問・江戸時代までの学問）が、400 年経っても影響力を持っていることに、とても驚かされました。

おそらく孔子や孟子のような聖人を目指す本当の学問をしたいと 11 歳の時に夢に燃えた中江藤樹の決意が、この結果に結びついていることに気づくことができました。改めて純粋で真面目な想いの強さが、感化力につながることを理解することができました。

最近、ビジネス本の中で『武士道』のような日本の心学の流れをくむものが注目されているのは、心掛けと結果の関係を厳しく課した中江藤樹の教えが人材育成の最強のメソッドとしての位置づけをされているように感じています。

（＊メソッド＝教授法・研究などの論理的で組織だった方法・方式）

今回、より深く中江藤樹さんの感化力についてより深く学びたいと強く思ったのは、この読書会の思わぬ余波だと今頃になって気づかされ、改めて皆さんに感謝しています。

最後までお読みいただきまして誠にありがとうございました。

（↑中江藤樹とその母のお墓）

（↑良知館）